

医学部ウォーカー

1面：医学研究科長・医学部長就任にあたって／退職にあたって
2面：財政局長再任にあたって／「表情・体・心連動科学講座（いい表情と体・心のつながり研究）」の設置にあたって／最終講義
3面：第97回日本病理学会東北支部学術大会学生奨励賞受賞／前立腺癌診断の精度を飛躍的に高める国産の新規診断法「S23ISA%検査」の共同開発と保険収載／DMAT活動報告
4面：医学科学学位記伝達式／弘前大学学生表彰／臨床実習生（医学）認定証授与式
5面：第118回医師国家試験結果ならびに令和5年度卒業生の進路状況／青森県知事と新入生との懇談会
6面：入試専門委員会報告／研究室研修および優秀発表賞について／優秀発表賞を受賞して
7面：研究室研修優秀発表賞を受賞／写真コラム／第30回アレルギー週間市民公開講座「アレルギーと上手な付き合い方」
8面：BMRC第一回学術セミナーの開催について／第37回日本腫瘍病・肥満動物学会年次学術集会を開催して／若手研究者紹介動画／第12回世界自閉症啓発デー特別講演会in弘前
9面：学生だより／関連病院勤務報告
10面：留学だより／若手教員・医師だより／研究室紹介 胸部心臓血管外科学講座
11面：研究室紹介 消化器外科学講座／部活動紹介 ラグビー部・自転車競技部
12面：部活動紹介 バドミントンサークルクラブオール／人事異動

題字 元弘前大学長 遠藤正彦氏筆

医学研究科長・医学部長

就任にあたって

医学研究科長 石橋恭之



学会の理事長も務めさせて
いただいております。

医学研究科長としてやらなければならぬことは山積しておりますが、まずは福田学長、廣田先生方が推し進めてきた『地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）』の採択を目指したいと思えます。

J-PEAKSは地方の研究大学を意味するのではなく、その英文名Program for Fostering Japan's Peak Research Universitiesという名の通り、日本の研究力の発展を牽引する研究大学群の形成推進を目的としています。

そのためには医学研究科のみならず、COLINEXTを中心とした全学的連携と大学全体の研究力向上、さらに他機関との連携を通じて弘前大学の強みを向上させていくことが必須です。加えて岩木健康プロジェクトを基盤とした統合予防医学研究分野での国際連携を進め、弘前大学の国際化も進めていく必要があります。

また、本県の初期研修の特徴として、卒業生のほとんどが大病院ではなく一般病院を選択しているという事があげられます。今年一月に、弘前大学と青森県

退職にあたって

前医学研究科長 廣田和美
(麻醉科学講座 教授)

今年は、教授最後の年と
意気込んでいました。ところ
が、一月二十六日(金)に、

弘前大学は青森県の地域医療維持確保に向けた連携体制構築のため、青森県立中央病院及び青森県と三者協定を締結しました。この締結が元となり、福田学長より四月一日付けで青森県立中央病院に院長として赴任するように、私に要請がありました。種々の理由で二月十四日の記者会見までは

極秘事項となっていましたから、教室員をはじめとした医学研究科の皆様方にお伝えすることが出来ず、本当に心苦しかったです。また医学研究科長として、やり残したことが多数あり、それも心残りです。地域中核特色ある研究大学強化促進事業採択を目指しての再申請、老朽化の進む建物の

整備計画の策定と史跡問題打開のための市との交渉、光熱費高騰と施設・設備の修繕費確保のためのスペースチャージの導入、COLINEXT副拠点長としての研究推進、そして教員ポイント抑制への対策、新臨床研究棟への移転等々、問題が山積しており、それを急に後任に決まった石橋医学研究科長にお願いしなければならぬことは、大変心苦しかったです。石橋先生も、大変戸惑われたのではと思います。石橋先生、どうか宜しくお願い致します。

さて、県立中央病院ですが、一時期から以前のような大学との密な交流が減り、関係は徐々に冷え込んでいく状況が続いていました。しかし、最初に書いたように、県は大学を重視する医療政策に転換し、三者協定が結ばれました。これで、大学、県と県立中央病院が一体となって青森県の医療を支えていく体制の基礎ができたわけです。

しかしながら、県立中央病院に赴任して感じたことは、関係が冷え込んでいた長い間に、県立中央病院はだいぶ大病院のやり方とは違ってしまったなということでした。このこともあり、恐らく福田学長は、病院事業管理者に大山前附属病院長、院長に私を指名して、大学との関係の立て直しを託されたのだと思っております。とは言え、我々二人から見ると、時代に合わせて体制を新しくすることや、青森市民病院との統合問題等があり、軌道に乗せるまでが大変なミッションであると感じています。

私と大山先生は、教授就任が同じく二〇〇四年で、その年は国立大学法人化と

新臨床研修制度が始まった年でした。教授交代で教室員が減ったにもかかわらず、本来は沢山新人が入るはずの就任最初の二年間が新臨床研修制度のために、新人がゼロとなり、人員不足に苦しみました。そして、国立大学独立法人化に伴う附属病院の運営費交付金減額を補うべく、病院収入増、つまり労働負荷が強まり、教授就任後五年間とはとてもない苦労を強いられました。私自身も月に九・十日夜当番をしなければ教室が持たず、肉体的にも精神的にもかなり参りました。何とか関連病院が人数減に耐えてくれて崩壊せず、また院内の麻醉科診療にかかわる診療科や部署の方々の御協力の下、何とか踏ん張れました。特に、当時手術部師長だった久保現看護副部長が「麻醉科の先生方は働き過ぎです。血液ガス分析は今後我々が行います。」と言ってくれて、手術部の看護師皆さんが、麻醉科医の業務軽減のためのサポートをしてくれたこと、さらに当時手術部長だった福田幾夫教授（胸部心臓血管外科）も多職種連携を強めることで、我々麻醉科医の仕事量の軽減を図って下さったことは大変助かりました。さらには、当時の花田病院長も、私を呼び止めて、「廣田君、君は働き過ぎだ。少し休みなさい」と言ってお下さったことで、病院長が常に我々の仕事を見ていてくれたと知り、大変嬉しかったのです。もうひと踏ん張りできると思いました。正直、皆さんの支援がなければ教室は崩壊していたのではと思っています。大山先生も、私と同じ様に、薄

水を踏む思いで、教室運営をされていたと思います。そして、教授就任から十四年後の二〇二〇年、今度は大山先生が病院長、私が医学研究科長に同時に就任しました。しかし、ご存じのように、二〇二〇年はCOVID-19禍が本格的に日本全土を覆った年であり、二人とも大変な日々を送ることになりました。福田学長も二〇二〇年に学長に就任されましたので、学長、病院長、医学研究科長の連携を密にしたことで、弘前大学はCOVID-19禍を上手く乗り切ることが出来たと思っています。福田学長はCOVID-19禍での我々の働きを見て、二人を県立中央病院の幹部に指名されたのだと思っています。私と大山先生のコンビは、常に就任と同時に、難題に直面するような運命にあるようです。今後も、二人三脚で県立中央病院を盛り立て、大学との懸け橋となつて、青森県の医療に貢献できればと思っております。

組織は人です。皆様におかれましては、今後とも県立中央病院との人事交流において、互いを高め合えるような交流となるよう御配慮頂ければ幸いです。そして、今後とも御協力の程、宜しくお願い致します。

麻醉科学講座教室員をはじめとした医学研究科各講座の先生方並びに事務の方々に、二十年間支えて頂いた御蔭で、教授職を全うすることが出来ました。山あり谷ありの二十間で、山あり谷ありの二十間で恵まれて、幸せでした。この場をお借りして心より感謝申し上げます！有難うございました！

附属病院長再任にあたって

附属病院長 袴田 健一



この度、附属病院長に再任されました袴田です。引き続きよろしくお願いいたします。

昨年四月の就任時は、コロナ禍の長いトンネルを抜けようとする時期でした。如何に安全に患者さんとご家族を病院内に受け入れるか、コロナ禍で痛んだ医療従事者の心の安寧と制限のない生活を如何にして取り戻すか、さらにはコロナ禍で大きく落ち込んだ病院経営の立て直しが大きな課題でした。いずれも、患者さん、ご家族の皆様、教職員の皆様のご理解とご支援により、徐々にウィズコロナに移行できたように思います。経営面でも様々な改革にご協力いただき、当初予想された大幅赤字を回避して年度末を迎えることができました。教職員の皆様には改めて心から感謝申し上げます。

さて、四月から「医師の働き方改革」がスタートしました。既に勤務時間管理や労働時間制の変更など、先生方には多大なご協力をいただいています。附属病院としても「働き方改善」とならないよう、大学本部のご理解をいただいて、新たに病院助手の職位を設け

て医員の処遇改善を図るとともに、医師の時間外労働の処遇改善も行いました。我々のミッションを果たすことを前提に、「医師の働き方改革」推進に引き続きご協力をお願いいたします。

現在、附属病院は多くの課題に直面しています。昨年来、全診療科・中央診療部門の部長ならびに主要スタッフ、看護師長から現在の課題と今後の診療の方向性について、さらに、多様な職種の皆様から現場が抱える課題についてヒアリングを重ねてきました。伺った内容は、看護師・薬剤師・事務職を中心とする人手不足、勤務スペースの狭小化、医療機器整備の必要性、医療情報システムの問題、DXの遅れによる複雑な事務作業、さらには休憩室（職員食堂）やロッカーの不足、駐車場不足等の勤務環境上の問題に至るまで、実に多様です。また、コロナ禍で拡大したコミュニケーション不足は職員の精神的健康を損ない、医療事故の引き金にもなっています。患者さんからも外来診療待ちの解消や手術待機期間の短縮など、改善を求める多数のご意見をいただいています。私に与えられた役割は、附属病院が抱えるこれらの多くの課題を整理し、教職員の皆様とともに解決策を導き出し、確実に実行に移すことだと認識しています。



私の専門である外科の世界では、このような対応を

最終的に生存に導く手術です。そしてグメージコントロール手術を成功に導く最も重要な要素は、チームビルディングです。現在、附属病院内に教職員と患者さんの声を取り入れて業務改善と患者サービス向上に繋げる組織、病院再開発・手術室拡充・医療情報システムの改善・少子化対応などを戦略的に推進する組織、

国際化・多職種の教育環境・研究環境・遠隔医療の整備を推進する組織を立ち上げ、間も無く稼働します。教職員の皆様との新たなチームビルディングの中で多くの課題解決に取り組む、本院がより一層社会貢献できる組織となるよう努めてまいります。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

もう少し具体的に述べたいと思います。本講座の目的は、ウェルビーイングとの関連性の高い表情や見た目の状態を解明するための適切な精度の高い評価指標を、岩木健康ビッグデータを用いて探索・開発を行うことです。例えば「いい表情」と「心・体」の関係性に年齢や性別がどう影響するか、岩木健康ビッグデータの三千項目と突き合わせることで、ウェルビーイングと複数の要因の因果関係を示すアルゴリズムの発掘・開発を目指します。これには、すでに弘前大学がこれまで行ってきた超多項目のビッグデータ解析技術および健康ビッグデータが必須ですので、これを活かした独自性の高い研究を本講座で取り組んでいきたいと考えています。

共同研究講座

「表情・体・心連関科学講座（いい表情と体・心のつながり研究）」の設置にあたって

表情・体・心連関科学講座 教授 玉田 嘉紀
(医療データ解析学講座 教授)

令和六年（二〇二四年）二月一日付で医学研究科に「表情・体・心連関科学講座（いい表情と体・心のつながり研究）」が設置されました。本講座はサントリーウェルネス株式会社（東京都港区）（以下「サントリーウェルネス」と）との共同研究講座で、同年三月二十六日に開設式を執り行

いました。開設式には、サントリーウェルネスからは同社生命科学研究所・中尾嘉宏所長、出雲貴幸部長、櫛木智裕シニアスペシャリスト、竹本大輔研究主幹にご臨席いただきました。講座の設置期間は令和八年一月三十一日までとなっています。開設時の講座構成員は、弘前大学からは玉田嘉紀教授、伊東健教授、三上達也教授、中路重之特任教授、石田水里助教、サントリーウェルネスからは開設式出席者に三名を加えた計十二名となっています。

サントリーウェルネスは、健康食品やスキンケアをはじめとする美容商品を提供する企業です。これまでもウェルビーイングに関するユニークな研究を推進し、それを活かした商品・サービス開発に取り組んでこられた企業でもあります。これはCOLINEXTの目指すウェルビーイング向上の理念とも一致します。お

気づきの方が多いかと思



本講座の研究目的を



「担当教員のキャリアを理

解し、参加者自身の



（次ページへ続く）

令和五年度

最終講義

鬼島 宏 教授
(医学教育学講座)

廣田 和美 教授
(麻醉科学講座)

学務委員長 富田 泰史
(循環器腎臓内科学講座 教授)

令和五年度の最終講義が、令和六年三月二十一日に医学部講義棟にて行われました（WEBでも配信）。今年度退任される二名の教授、鬼島宏教授（医学教育学講座）、廣田和美教授（麻醉科学講座）が最終講義を担当されました。

の一端を伺い知ることができました。鬼島教授は教育委員会委員や入試専門委員長、そして二〇一六年からは八年の長きにわたり学務委員長をお務めになられ、またバドミントン部顧問としても多くの学生から慕わ



廣田和美教授による「麻酔薬ケタミンと私の医学研究の変遷」：麻酔薬ケタミンに興味を引かれて研究を開始され、その後、研究が大きく発展していく過程を圧倒的な研究データと数多くの論文を提示いただきながら、詳しく紹介いただきました。ケタミンのアルブミン漏出抑制効果や気管支拡張作用、抗腫瘍効果ならびに抗鬱効果などについて、新しい研究手法を駆使しながら次々と明らかにされました。最近では、VRや脳波解析、そしてAIを用いた術後せん妄予測など、他分野の最先端技術を取り入れて教室員一丸となつて研究をさらに推し進めていることを紹介いただきました。仮説を実験で検証し、学会や論文として世界に発信する、まさに医学研究の醍醐味を改めてご教示いただきました。また、研究の発展のためには、国内外の多くの研究者と連携し、世界的な視野で研究を行うことの重要性を示されました。医学研究科長として多忙を極める中にありながら、医学研究を力強く推進されてきたPhysician Scientistとしての最終講義でした。

（前ページより）
れておりました。コロナ禍で実施されたJACMEによる医学教育分野別評価受審に際しては、準備の中心となつてご尽力されました。病理学、そして医学教育学への二十年間の熱い思いが伝わる最終講義でした。

お二人の先生は、各医学分野において顕著な業績

て、新しい研究手法を駆使しながら次々と明らかにされました。最近では、VRや脳波解析、そしてAIを用いた術後せん妄予測など、他分野の最先端技術を取り入れて教室員一丸となつて研究をさらに推し進めていることを紹介いただきました。仮説を実験で検証し、学会や論文として世界に発信する、まさに医学研究の醍醐味を改めてご教示いただきました。また、研究の発展のためには、国内外の多くの研究者と連携し、世界的な視野で研究を行うことの重要性を示されました。医学研究科長として多忙を極める中にありながら、医学研究を力強く推進されてきたPhysician Scientistとしての最終講義でした。

お二人の先生による講義終了後には多数の花束贈呈があり、会場を埋めた聴衆から大きな拍手が送られました。最後に副医学研究科長の上野伸哉教授から謝辞があり、最終講義の幕が閉じられました。令和六年四月から、鬼島先生は医学教育学講座特任教授として引き続き医学教育の発展にご尽力いただくことになっております。廣田先生は、青森県立中央病院に院長として赴任され、大学との連携がより一層強化されることになりました。

第97回日本病理学会東北支部学術集会

学生奨励賞受賞

医学科五年 永田 恵 未
(病理生命科学講座)

この度、二〇二四年二月十七・十八日に仙台市の東北大学医学部長陵会館で開催された第九十七回日本病理学会東北支部学術集会にて学生奨励賞受賞を受賞致しましたので報告致します。大学四年生であった私に学会発表をさせていただく機会をくださった、医学教育科学講座鬼島宏教授や病理生命科学講座吉澤忠司先生、後藤慎太郎先生を始めご指導いただきました方々にこの場を借りて感謝を申し上げます。

今回は「両側下腿皮膚潰瘍の1例」という演題で、カフシフィラキスという稀少な皮膚疾患について症例報告させていただきました。カルシフィラキスは病理医間でも極めて認知度が低い疾患で、実際参加されていた会場の先生方の多くはこの疾患の経験が無く、病理学会にこの疾患の存在を広めることができて非常に有意義な機会となりましたし、私自身も大変勉強になりました。また、稀少疾患であるにも関わらず、臨床情報と僅かな病理所見を挙げるとともに、医学部ならびに医学研究科の要職をお務めになられました。本学の発展に長きにわたり尽力されてきた鬼島先生、廣田先生に心より感謝を申し上げますとともに、今後ともお力添えをいただきま

すよう、よろしくお願ひ申し上げます。

を手がかりに診断を行う「病理医」の仕事を変えてかつこいいなと感じました。病理学会に参加させていただいたのは今回で四回目だったのですが、初めてのプレゼンテーションであることや先生方の前で発表ということに非常に緊張し、手や足が震えていたことを覚えています。しかし、質疑応答や発表後に会場の先生方から「良い発表でとても勉強になりました」とのお言葉を沢山いただきました、学会発表を経験させていただいて本当に良かったという達成感や安心感に包まれました。



私は二年生の頃から病理生命科学講座で勉強しており、三年生の研究室研修でもお世話になりました。病理生命科学講座は、先生方やスタッフさん、学生を含めてアットホームで勉強する機会を与えてくれる場所です。改めて、この度のご指導やご支援に感謝申し上げます。

前立腺癌診断の精度を飛躍的に高める 国産の新規診断法「S2,3PSA%検査」の 共同開発と保険収載

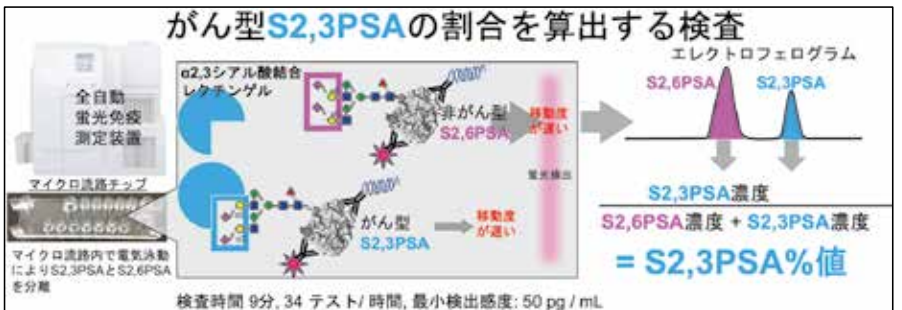
糖鎖工学講座 助教 米山 徹

前立腺癌は日本および欧米諸国において男性の悪性腫瘍の中で罹患数が最も多い癌です。前立腺癌の検査では、まず血清中の前立腺特異抗原（PSA）値を測定するスクリーニング検査（PSA検査）が行われます。PSAは前立腺組織で生成される糖タンパクで、前立腺癌の患者は血液中のPSA値が高くなります。しかし、前立腺肥大症や前立腺炎等の良性の前立腺疾患でもPSA値が高値を示すことがあるため、PSA値が高いからといって必ずしも前立腺癌であるとは限りません。確定診断には針生検を行う必要がありますが、PSAをベースに針生検の適応を決めると、七〇%の患者さんには過剰な検査になり、感染症や出血などの合併症のリスクもあります。このような理由から、前立腺癌と良性疾患を鑑別できる精度の高いバイオマーカーの開発が待たれていました。

大山力 泌尿器科名誉教授は糖タンパク糖鎖の研究で米国留学中であつた一九七七年に、PSA糖鎖の癌性変異に関する仮説を立案し、研究を開始しました。糖タンパク糖鎖の正確で詳細な構造解析は非常に難しく、紆余曲折がありました。が、幸いなことに、日本は糖鎖構造解析の分野で世界をリードしており、質量分析の専門家の皆様のご協力、健常者や前立腺肥大症などの良性疾患の患者で

は、S2,6結合型シアル酸を持つPSA（S2,6PSA）が多く、前立腺癌の患者ではS2,3結合型シアル酸を持つPSA（S2,3PSA）の割合が増加することを二〇〇八年に論文発表しました。この癌性変異を検出する新規検査法開発に本格的に取り組みタイミングで筆者も本研究に参加しました。さらに、二〇一三年から富士フイルム和光純薬との共同研究を開始し、レクチンマイクロキャビラリー電気泳動法の開発に取り組んでいた同社の石川友一氏が本学大学院生として新規体外診断薬の共同開発に取り組みました。そして、多くの皆様のご支援を頂き、全自動蛍光免疫測定装置「ミュータスワークー S2,3PSA・S2,6PSA」が二〇二二年八月二十二日に製造承認を受け、S2,3PSA%検査として、二〇二四年二月一日付けで保険適用されました。

大山名誉教授の着想から二十五年を経て、国産で初めて保険適用された前立腺癌体外診断薬が誕生しました。弘大から世界に発信するこの検査によって、前立腺癌ではない患者への針生検を減らすことができます。今後、広く普及活動を開き、適応拡大、海外展開を目指し、鋭意研究開発を進めます。S2,3PSA%の開発に取り組んで頂いた皆様に深く感謝申し上げますとともに引き続きご指導・ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



DMAT活動報告

救急災害・総合診療医学講座
教授 花田 裕之

令和六年一月一日は能登半島地震が始まった。DMATは自動待機基準が定められており、震度七以上で

大津波警報が出された場合は全国のDMATが自動待機となる。弘前大学でも救（次ページへ続く）



維持するなどの活動を行うが、そのためには調整

（前ページより）
命センター地下で準備を始めた。志賀原発でも震度五・五以上であったため、原子力災害医療派遣チームにも待機要請が出された（翌日解除）。中部から近畿地域中心にDMAT出動要請が行われたが、三日から雪が積もり、雪でも活動可能な北東北地域のDMATに六日派遣要請が出された。このころには被害が当初予想よりひどく、建物の倒壊や道路の寸断、電気・水道などライフラインの断絶が明らかになっていった。六日に救命センター地下で準備が再度行われ、人選とその間の勤務調整、食料の調達（病院給食から非常食の提供をいただきました）を行い、翌日珠洲市総合病院へ日没までに集合という派遣要請に備えた。七日午前三時に出発した弘大DM

AT二隊八名（Dr.二名伊藤、長谷川、Ns.二名上原、工藤、Lo.四名熊澤、花田、加藤、辻口：長距離運転やその後の活動を考慮して人選）車二台は大雪山警報を意図して、東北自動車道から磐越、北陸道を通り能登総合病院を経て日没前に珠洲市総合病院に到着した。Dr.二名は八日夜から当直対応、Ns.一名は八日夕方からER支援、九日病棟支援を、Lo.四名は病院指揮所本部ロジ支援（クロノロ、広域搬送患者管理など）を行った。

「瓦礫の下の医療」といった、急性期の現場救急医療が主体で始まった日本DMAT活動は東日本大震災、熊本地震、その後の繰り返し洪水などを経て、現地の医療機関をいかに維持するかということに重点が移ってきている。患者移送により病院規模を縮小させて維持するなどの活動を行うが、そのためには調整

が大切で、ロジスティクス的重要性が高まり、ロジスティクス専門チームも形成されるに至っている。弘大のチーム構成はこのような活動を意識してなされた。九日に珠洲から金沢へ患者を搬送して、第一次隊の活動は終了した。その後十三日に東北地区全体にチーム派遣要請があり、弘前大は1/16(火)17(水)まで継続的に活動を行った。病院救急車を現地に置き、人は新幹線で移動することとした。

- 1/16(火)17(水) 救急車輸送部隊（花田昌吾&北村隆雄）→救急車を金沢市へ。
- 1/16(火)19(金) 第一隊（伊藤隊）→今回も珠洲市で活動。高齢者搬送支援。
- 1/18(木)22(月) 第二隊（長谷川隊）→S&CJ（珠洲Care Unit）で活動。搬送支援。
- 1/20(土)24(水) 第三隊（奈良岡隊）→S&CJ（珠洲Care Unit）で活動。搬送支援。
- 1/22(月)27(土) 第四隊（横田隊）→珠洲市総合病院支援指揮所の本部長として活動
- 1/26(金)27(土) 救急車輸送部隊（花田昌吾&北村隆雄）→金沢市から救急車回収。

活動内容の詳細については救命センターホームページ（<https://emergency.hirosai.ac.jp/tag/dmat>）能登半島地震を参照いただきたい。走行距離が三十万Kmを超えようとする病院救急車（弘前消防から移譲され十年）がいつタメになるか心配しながらの活動だったが、ロジ担当者の巧みな運転でパンクすることもなく、種々のミッションをこなしてきた。

令和5年度 医学科学位記伝達式

前学務委員長 鬼島 宏
（医学教育学講座 特任教授）

令和六年三月二十二日午後四時から基礎大講堂において、令和五年度学位記（医学士）伝達式が、福田眞作学長、袴田健一附属病院長、ならびに澤田美彦鵬桜会理事長のご列席のもとで行われました。廣田和美医学部長からは一人一人に学位記が伝達され、医学部長挨拶では新型コロナウイルス感染症拡大の情勢下であるが、この困難も必ず糧となるはずであるから、今後も努力を継続して医療に貢献してほしいとの激励がありました。鵬桜会理事長よりは、「鵬」のごとくしっかりと羽ばたいて大いに活躍してほしいとの期待が込められた祝辞をいただきました。



た。弘前大学医学部附属病院のロゴを見て、弘前大出身の方から声をかけられて感謝されたこともあった。院内外で協力いただいた方々にお礼申し上げますとともに、被災地域の復興と被災者の方々のご健康をお祈り申し上げます。



今回、医学部医学科の卒業生は百四十七名であり、地域定着枠（AO入試入学、前期日程定着枠入学）を中心として七十五名の卒業生が弘前大学関連の医療施設（うち青森県内は六十五名）で臨床研修を行い、弘前医療圏での活躍が期待されています。多くの学生が勉学の苦勞を乗り越え、さらには医師国家試験合格の直後でもあり、学位記授与式・伝達式の当日は笑顔の花が咲いていました。

学位記伝達式後の午後七時からアトホテル弘前シティにおいて医学部医学科卒業記念謝恩会が開催されました。過去三年間の謝恩会は中止もしくは簡略化して行われたため、しっかりとした形式で行われるのは四年ぶりになります。集合写真撮影後は、謝恩会幹事による明快な司会の下、廣田医学部長・鬼島学務委員長の祝辞で開幕しました。会が始まると、各先生を囲み勉学や課外活動の想い出を振り返ったり、今後の進路について語り合ったりと、卒業生は限られた時間を惜しむように過ごしていました。会の途中では、謝恩会恒例の学長・医学部長・学務委員長とのジャンケン大会などで、会場は大いに沸き、あつという間の二時間が経ちました。最後に先生方が壇上に登り、卒業生から花束が贈られ、謝恩会の幕が閉じられました。一学年全員が集合する機会は、多分これが最後ではなからうかと思っています。弘前大学医学部医学科卒業という誇りを背負い、これからも切磋琢磨して、全国で活躍してくれることを願うものです。



令和5年度 弘前大学学生表彰

教育委員会委員 今 泉 忠 淳
（血管・炎症医学講座 教授）

弘前大学では、研究活動、社会活動、課外活動などで特に顕著な成果を挙げた学生の表彰を行っています。令和五年度の学生表彰のうち、医学部の学生が表彰されたのは、表のとおりです。新型コロナウイルス感染症による様々な活動の制限もなくなりましたので、医学科学学生の皆さんが勉学・課外活動に大いに活躍されることを期待しています。

【表】令和5年度 弘前大学学生表彰 医学科分

医学科3年 工藤壮太 第66回東日本医科学学生総合体育大会 柔道競技 男子73Kg級 優勝	医学科6年 相沢美月 第76回東北学生陸上競技選手権 女子10000m 競歩 優勝
---	---

令和6年度 臨床実習生（医学） 認定証授与式

前学務委員長 鬼島 宏
（医学教育学講座 特任教授）

令和六年度臨床実習生（医学）認定証授与式（旧SD章授与式）が、令和六年二月二十二日に基礎大講堂にて挙行されました。認定証授与式では新五年次学生百十四名が、医の倫理に従って行動することを誓うことで、診療参加型臨床実習（Clinical Clerkship）を開始するという大きな意義があります。臨床実習では、医療現場で患者さんの前に立たせていただくことの責任の重さと、診療行為を通じて医学を学ばせていただくことへの感謝の念を持ちながら、医療チームの一員として真摯に行動することが求められています。本学における認定証授与式（旧SD章授与式）は、共用試験（Computer Based Testing CBT および Objective Structured Clinical Examination OSCE）が開行された平成十七年度より行われ、今回で二十回目となります。平成二十六年度からは、共用試験の合格者に対して全国統一質保証システムのの一環として、全国医学部長病院長会議がSD認定証を付与する形式となり、今年度からは、共用試験公的化に伴い医療系大学間共用試験実施評価機構に（次ページへ続く）



（前ページより）
よる臨床実習生（医学）認定証を交付することになりました。つまり、認定証は、臨床実習生の身分証（ID）であると同時に、臨床実習を開始するための必要な知識と技能を身につけた証でもあります。

認定証授与式では新五年度学生全員が臨床実習性のユニフォームとして白衣姿で臨みました。初めに廣田和美医学部長と鬼島宏学務委員長の挨拶があり、次いで袴田健一附属病院長訓示の後、新五年度学生代表の小久保倫文さんに附属病院長から認定証が授与されました。最後に、新五年度学生代表が以下の「弘前大学医学部臨床実習生の誓い」を宣誓しました。

「弘前大学医学部臨床実習生の誓い」
臨床実習生の一人として医療の現場に参加するに際し、
1. 私は、人類への奉仕に自分の人生を捧げることを誓います。
2. 私は、学び得た医学知識をもとに、良心と尊

第118回医師国家試験結果 ならびに令和5年度卒業生の 進路状況

学務委員長 富田泰史
（循環器腎臓内科学講座 教授）

令和六年二月に実施された第百十八回医師国家試験の結果が公表されました。

全体の受験者数は一万三百三十六人（うち新卒九千四百八十九人）、合格者数は九千五百四十七人（九千四百八十八人）であり、合格率は九二・四％（九五・四％）

厳をもって医学の務めを果たします。

3. 私は、生命の始まりから人命を最大限に尊重し続けます。また、人間性の法理に反して医学の知識を用いることはしません。

4. 私は、患者の健康を私の第一の関心事とします。

5. 私は、私への信頼のゆえに知り得た患者の秘密を、たとえその死後においても尊重します。

6. 私は、私を教え導く人々に尊敬と感謝の念を捧げます。

7. 私は、私の自由意志に基づき名誉にかけてこれらのことを厳粛に誓います。

なお、この「誓い」を常に心に留めて臨床実習に臨むよう、付与された認定証には、「誓い」も添付されています。認定証授与式の目的を十分に理解して、五年度から始まる臨床実習に真摯に取り組んでほしいと思います。

H30～R5 卒業生進路状況

	H30年度 卒業生進路		R1年度 卒業生進路		R2年度 卒業生進路		R3年度 卒業生進路		R4年度 卒業生進路		R5年度 卒業生進路	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
青森県	53	44.9%	60	48.4%	54	49.1%	68	46.9%	56	43.1%	64	43.5%
北海道	3	2.5%	4	3.2%	4	3.6%	2	1.4%	3	2.3%	2	1.4%
青森県以外の東北地方	9	7.6%	13	10.5%	12	10.9%	12	8.3%	21	16.2%	21	14.3%
東京以外の関東地方	25	21.2%	22	17.7%	20	18.2%	24	16.6%	19	14.6%	29	19.7%
東京都	10	8.5%	4	3.2%	2	1.8%	7	4.8%	5	3.8%	6	4.1%
中部	9	7.6%	11	8.9%	10	9.1%	8	5.5%	8	6.2%	6	4.1%
近畿以西	7	5.9%	4	3.2%	5	4.5%	9	6.2%	6	4.6%	7	4.8%
国試不合格・その他	2	1.7%	6	4.8%	3	2.7%	15	10.3%	12	9.2%	12	8.2%
合計	118	100.0%	124	100.0%	110	100.0%	145	100.0%	130	100.0%	147	100.0%
医師国家試験合格者	116	98.3%	118	95.2%	107	97.3%	132	91.7%	119	91.5%	136	92.5%

こちらも全国ワースト五位でした。昨年度ならびに昨年度の新卒者合格率も各々九一・五％、九一・七％であり、残念ながら本学の合格率は三年連続して低迷しています。今年度の結果を詳細に検討すると、留年を経ずに六年間で卒業した学生の合格率は九五・〇％と全国平均とはほぼ同等であるのに対し、留年を一度でも経験した学生の合格率は八〇・八％と低く、昨年と同様の傾向でした。留年を経験した学生に対するサポート体制のさらなる充実とともに、医師国家試験合格率向上に向けた対策（勉強スペースの確保や模試の積極的な活用など）に取り組む必要があります。

次に、令和五年度卒業生

の進路状況をご報告いたします。青森県は六四人（四三・五％）であり、ほぼ例年並みの人数です。今年度は、青森県以外の東北地方が二人（一四・三％）と昨年と同人数でしたが、東京都を含む関東地方は三五

人（二三・八％）と増加しています。学生の出身地が初期研修病院の選択にも影響しているようです。既に初期研修が始まっておりますので、先生方、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

青森県知事と新入生との 懇談会

学務委員長 富田泰史
（循環器腎臓内科学講座 教授）

宮下宗一郎青森県知事と弘前大学医学部医学科新入生との懇談会が、令和六年四月十日に医学部基礎大講堂において開催されました。この懇談会は平成十七年に始まり、以降二十年の長きにわたり毎年開催されています。県知事と医学生との懇談は全国的にも極めて稀で貴重な会となったっており、春は新入生を、秋は五年生を対象として開催されています。宮下知事就任後の新入生を対象とした会としては今回が初めての開催になります。県側からは宮下知事に加え、守川義信健康医療福祉部部長、藤野安弘良医育成支援特別顧問らが出席し、福田眞作学長、石橋恭之医学部長、袴田健一附属病院長の



列席のもと、学務委員長の司会で行われました。

懇談会の初めに宮下知事から「青森県の目指す医療の姿」と題した講演がありました。青森県の総人口は現在の百七十七万人から二〇五〇年には九十一万人まで減少すること、青森県の人口十万人あたりの医師数は着実に増加しているものの、全国と比較してまだ不足していることなどを、統計データに基づき紹介されました。面積が大きい青森県では医師がいらない地域もあり、「二人の医師の役割はとても大きい」ことを強調されており、一人の医師の役割は



調されており、また、知事がむつ市長在任中に実施した新型コロナワクチン大規模接種（一日で四千九百人ほどの接種を実施）の経験を踏まえ、一人一人で行うことができることは限られていても、「皆で協力すれば大きな力となって地域を守ることにつながる」

コラム

医学部 こぼれ話

先日、東京に行く用事があり目的が皇居の近くであった。皇居のお堀と石垣を見て、昔は参勤交代などで弘前城から江戸城まで歩いて移動していたのだよなあとと思ったのだが、ふと移動に何日要したのか気になったので調べた。ウェブ上に弘前市の資料（新編弘前市史）が公開されており、それによると十八・九日で江戸まで到達したそうである。時代によって経路は異なるのだが、追手門から出発したあと、少し南下し、そしてなんと附属病院前の道を通っていたようである。そこから親方町を抜け土手町に出て南下し、松森町から富田町に入

り文京キャンパス近くの富田町枳形を通り、そして矢立峠を越える羽州街道を進み、桑折で奥州街道に合流し、本所（現墨田区）の津軽藩上屋敷に至ったそうである。普段通勤通学に使用している道が江戸時代にも大名行列が実際に使用していた、というのはなんと不思議な感覚である。当時から地名も全く変わっていないようである。歴史を身近に感じることのできる弘前市ならではのことはないだろうか。話を戻すが、その時の出張は研究予算のご説明に東京に行ったわけなので、昔からやっていることは全く変わっていないな、とも思ったのだ。

ことを示されました。三方を海に囲まれ面積が大きい青森県の地理的特徴や急速に進む人口減少を踏まえ、今後は遠隔医療の推進や医師にとつて働きやすい環境整備に力を入れていくことが示されました。

知事の講演の後に学生との懇談が開催されました。学生からは、過疎地域への県としての医療体制、地震などの大規模災害への体制整備などの質問があり、知事ならびに県のスタッフも交えて、和やかな雰囲気の中で活発な意見交換が行われました。

現在、弘前大学には青森県を含め自治体からの寄附講座が複数設置されており、弘前大学を起点として県内の医療機関を循環する



令和6年度

入学試験報告

医学科入試専門委員長 上野 伸哉
(脳神経生理学講座 教授)

弘前大学医学部医学科では、例年、三種類の入学試験形態で選抜を行ってまいりました。令和6年度入試は、新型コロナウイルス対策のガイドラインも廃止され、令和五年十月に総合型選抜Ⅱ、十一月に総合型選抜Ⅰ、十二月に学士編入学（二年次編入）、年が明けて令和六年二月に一般選抜（前期日程）の順に滞りなく実施することができました。ご協力いただいた教員、事務

の方々に感謝いたします。総合型選抜Ⅱは令和三年度に旧AO入試から名称変更を行い、同時に新型コロナウイルスの影響もありワークショップを中止していましたが、令和六年度も引き続き中止とし、個人面接、およびケーススタディ、大学入学共通テストを点数化し総合的に評価を行いました。一般選抜においても令和三年度から数学と英語の二科目を廃止し、文章や資料の読解、分析を含め総合的思考力を試す総合問題のみに変更しています。しかしながら、令和七年度の入試より、入学者の多様性を確保する観点から

選抜区分と重点評価項目を組み合わせ、多面的な入試を実施するよう見直しを行いました。総合型選抜Ⅱはワークショップの廃止を決定し、行動力や意欲に評価の重点をおき、総合的評価を行うこととしました。また、一般選抜は総合問題を廃止し、重点評価項目を学力に絞って再び数学と英語の二科目を課す形に戻すこととなります。

さて、令和六年度の志願者倍率、志願者の地域別入学者の資料をご参照ください（表1、2）。志願者倍率は総合型選抜ではほぼ前年度と同様、また一般入試は前年度より上昇し、全体としての志願者倍率は上昇しています。しかし、総合型選抜の志願者倍率はここ数年やや減少傾向、特に男

子受験生の減少傾向が見られます。その影響もあるためか、今年度一般入学者は女子学生数が男子学生数を上回る状況となっています。二年度次学士編入学者の志願者倍率は前年度より少し減少しましたが、ほぼ例年通りです。地域別の入学者数の資料からは、青森県出身者の比率が上昇傾向を保持しており、今年度も同様となっています（表3）。

近年は北海道、青森県以外の東北、特に秋田と岩手からの受験者数、合格者数の減少傾向が見られます。ここ数年、新型コロナウイルスの様々な場所での入試説明会等が中止になったことで、受験者との接点が少なくなったことも影響していると考えられます。次年度はさらに弘前大学医学部医学科の受験者数を増加させるため、より積極的に大学紹介を行っていく予定です。

表1. 志願者倍率（カッコ内は受験者倍率）

年度	総合型選抜 ※R2までAO入試	前期日程	計
H30	2.23 (2.23)	8.22 (7.09)	5.71 (5.05)
H31	2.19 (2.19)	9.82 (7.00)	6.62 (4.98)
R2	2.12 (2.12)	5.03 (4.16)	3.94 (3.39)
R3	1.83 (1.83)	4.06 (3.34)	3.13 (2.71)
R4	2.43 (2.43)	5.34 (4.40)	4.25 (3.36)
R5	2.43 (2.43)	6.89 (5.66)	5.21 (4.45)
R6	1.79 (1.79)	8.07 (6.76)	5.71 (4.89)

募集人員：

AO入試（すべて地域定着枠）は、平成30・31年度47名、令和2年度42名、令和3年度から総合型選抜に名称変更し47名、令和4・5年度42名。

前期日程の定員は、平成30・31年度65名（定着枠15名）、令和2年度70名（定着枠20名）、令和3年度65名（定着枠15名）、令和4・5年度70名（定着枠20名）。

総合型選抜（旧：AO入試）と前期日程を合わせた定員は、平成26年度～令和5年度が112名。

表2. 志願者倍率 学士編入学（カッコ内は受験者倍率）

年度	学士編入学
H30	5.55 (5.35)
H31	7.30 (6.90)
R2	8.00 (7.70)
R3	10.25 (9.15)
R4	12.55 (11.55)
R5	10.45 (9.65)
R6	8.30 (7.85)

和七年度の入試より、入学者の多様性を確保する観点から

表3. 地域別入学者数（AOおよび前期入試の合計）

年度	青森県	東北5県	北海道	その他	計
H30	45 (30/15)	14 (5/9)	5 (2/3)	48 (22/26)	112 (59/53)
H31	52 (27/25)	13 (8/5)	4 (3/1)	43 (18/25)	112 (56/56)
R2	39 (21/18)	21 (11/10)	6 (4/2)	46 (29/17)	112 (65/47)
R3	42 (28/14)	21 (11/10)	2 (2/0)	47 (32/15)	112 (73/39)
R4	43 (24/19)	13 (6/7)	3 (1/2)	53 (28/25)	112 (59/53)
R5	49 (29/20)	4 (4/0)	8 (3/5)	51 (24/27)	112 (60/52)
R6	41 (19/22)	18 (5/13)	8 (3/5)	45 (25/20)	112 (52/60)

カッコ内は男女比

表4. 令和7年度入試日程（予定）

令和6年10月下旬	総合型選抜（ケーススタディの自学自習、個人面接）
令和6年11月下旬	学士編入学（第2年次）第1次選抜（学力試験）
令和6年12月中旬	学士編入学（第2年次）第2次選抜（個人面接）
令和7年1月18日（土） 1月19日（日）	大学入学共通テスト
令和7年2月下旬	一般選抜前期日程（学力試験） 一般選抜前期日程（個人面接）

入試は、新入生が入学する時期で呼称されますので、令和7年度総合型選抜・令和7年度学士編入試（第2年次）・令和7年度一般選抜（前期日程）が実施されます。

令和5年度

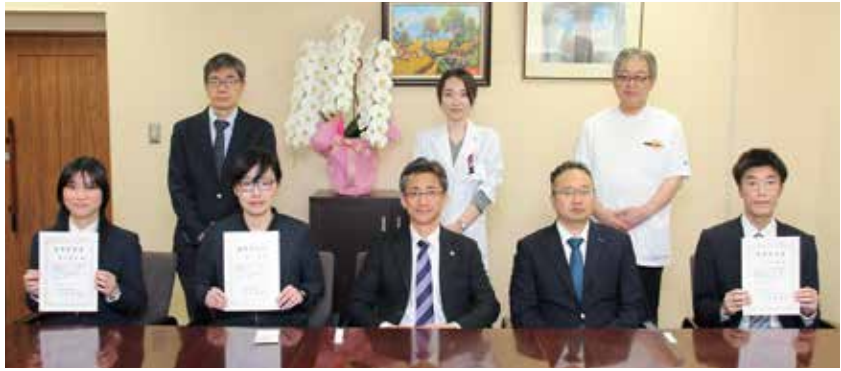
研究室研修および
優秀発表賞について

分子病態病理学講座 教授 水上浩哉

令和五年度の研究室研修は三年生が十月から各講座に約半年間、週三日間午後出身者の比率が上昇傾向を保持しており、今年度も同様となっています（表3）。

近年は北海道、青森県以外の東北、特に秋田と岩手からの受験者数、合格者数の減少傾向が見られます。ここ数年、新型コロナウイルスの様々な場所での入試説明会等が中止になったことで、受験者との接点が少なくなったことも影響していると考えられます。次年度はさらに弘前大学医学部医学科の受験者数を増加させるため、より積極的に大学紹介を行っていく予定です。

十分に発揮しており、英語での発表を無難にこなしておりました。質疑応答は大部分の学生、教員の方々とともに日本語で行っておりました。あくまでも私のお願いですが、発表は原稿を読むのではなく暗記を、また英語による質疑応答を期待したいところです。審査員の先生方による発表の採点結果を中心に、評価点が高かった腫瘍内科学講座で研修した田中堯さん、神経精神医学講座で研修した鄭蓄さん、脳神経生理学講座で研修した畠山紗希さんの三人を研究室研修優秀発表賞とさせていただきます。



この度は、優秀発表賞をいただき、大変光栄に思います。ご指導をいただいた腫瘍内科学講座の佐藤温先生、斎藤絢介先生、陳豫先生に、改めてお礼を申し上げます。私が先生方からいただいたテーマは、睥がんの予後因子についてでした。今

優秀発表賞を受賞して

医学科四年 田中 堯

いずれも素晴らしい発表、抄録、論文でした。現在、日本の基礎研究力の低下が指摘されております。特に医学系の基礎研究は、いわゆるphysician scientistのなり手が少なくなっている状況です。このような取り組みを通じて多くの学生の皆さんに研究の楽しさ（苦しさ？）を知ってもらおうと同時に、医学科の各講座に興味を持ってもらい、一人でも多くの方が弘前大学で

将来研究してほしいと思います。また、各講座の指導教官の先生方には忙しい中、学生の皆さんを指導していただき厚く御礼を申し上げます。特にいくつかの講座の教授には学生の受け入れ人数の決定時に受け入れ人数を増やしていただき、大変感謝しております。今年度も充実した研究室研修にしたいと思っておりますので、ご協力どうぞよろしくお願いいたします。

回、二種の炎症マーカーを組み合わせたスコアリングの結果を発表しました。悪性腫瘍は、私が医師を志すきっかけとなった疾患です。今回の研修では、いよいよ研究の一端に携わることが出来ると思います。張り（次ページへ続く）

公益社団法人 青森医学振興会

【沿革】 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会副総務医学振興会発足（任意団体）
平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立認可
平成24年4月1日 公益社団法人青森医学振興会へ移行認定

当会では、青森県の医学・医療の発展を促進するため、次の事業活動を行っております。
○医学教育活動の活性化を図るための事業への支援
○医学・医療の高度化に資する医学研究事業への支援
○地域医療の振興に寄与する事業への支援
○海外との学術交流等の活性化を図るための事業への支援

随時、会員の募集とご寄附を受付しております。
本会の公益目的事業に対する寄附金（年会費を含む）は、確定申告をしていただくことにより税制上の優遇措置の対象となります。
年会費は、下記いずれかの口座へお振込み願います。
なお、ご入会をご希望される方又はご寄附（年会費を除く）をされる方は、お手数ですが当会までご連絡をお願いいたします。ゆうちょ銀行については、専用の払込用紙を用意しております。

公益社団法人 青森医学振興会			
口座	青森銀行		普通 1087485 (お願い：振込手数料はご負担願います。)
	みちのく銀行		普通 0198579 (お願い：振込手数料はご負担願います。)
会費	ゆうちょ銀行		口座記号番号 02200-4-57580 (専用の払込取扱票を利用の場合は、振込手数料は無料)
	会員種別	年会費	
	医学部教員	1万円	
	医学部卒業生等	2万円	
	賛同する個人・賛同する団体	2万円/10万円	

お問い合わせ 公益社団法人青森医学振興会事務局
TEL・FAX 0172-40-2872 E-mail: info@aomori-mpm.jp

写真コラム (24)
続・南塘グランド

血管・炎症医学講座
教授 今 泉 忠 淳

本コラムの(20)で、南塘池・南塘グランドについて紹介しました。その後、明治以降の南塘グランドの変遷について、弘前大学附属図書館事務長の三上豊氏より、いくつかの参考文献*を教えていただきましたので、年表にまとめておきたいと思います。令和5年(2023年)秋、南塘グランドは野球部による使用を終了し、12月より鉄板を敷いて駐車場となりました。【写真1】は鉄板を敷く前の南塘グランド(2023年)で、【写真2】は鉄板を敷いて駐車場となった南塘グランド(2024年)です。



【写真1】 南塘グランド2023



【写真2】 南塘グランド2024

南塘グランドに関する年表

1614年	慶長19年	弘前城の南の防御として、堤が築造され、南塘池ができる。
	？	農業用ため池として使用される。
1871年	明治4年頃	市が運動場に造成。
1878年	明治11年	公立学校の学田、畑地。
1923年	大正12年	「弘前野球後援会」が結成される。
1924年	大正13年	弘前市が南塘グラウンドを建設。
1941年	昭和16年	太平洋戦争による食糧不足により、農園に。 生徒・住民がイモやカボチャなどを耕作。
1956年	昭和31年	弘前市から、医学部へ正式移管。
2023年	令和5年	野球部による使用を終了し、鉄板を敷いて駐車場に。

*参考文献:「弘前市史 明治・大正・昭和編」(名著出版, 1973.11, p.557-558)
「弘前」 山上笙介編(津軽書房, 1980.11, p.79 写真のキャプション等)
「弘前市史 下」(津軽書房, 1985.11, p.163)
「弘前市史 下」(津軽書房, 1985.11, p.159-160)

(前ページより)

切って取り組みました。しかし、データの整理を進める中で、実際の患者さんを対象にした研究の難しさを感じる場面が多々ありました。私は、まだ学生という立場で、診療に関わることなくデータを使わせたのだいたため、最初は患者さんのデータを単なる数字として捉えていました。しかしながら、先生方にご指導をいただく中で、その患者さんがどういった人物で、どういう状況にあったのかを詳しく知り、初めての個々のデータ同士の因果関係が明らかにするという過程を何度も経験しました。やは

り、実際に自分で診療せずには、わからないことが多いと感じました。一方で、一人ひとりの患者さんから得られる膨大なデータの中から、必要なものを取捨選択するのにも苦労しました。論文としての説得力を持たせるためには、主張を一貫させ、シンプルにまとめる必要があるとのこと指導をいただき、情報量を増やすほど説得力が失われるというジレンマに直面しましたが、先生方の細かなご指導のおかげで、最終的には何とか形にすることができました。

研究室研修優秀発表賞を受賞

医学科四年 鄭 蕾

この度は、研究室研修優秀発表賞に選んでいただき、心より感謝申し上げます。……きない要素であるとの認識でしたが、実感したことはありませんでした。今回の研修を経て、これら二つの概念が、ようやく繋がりはじめたように感じています。このような貴重な勉強の機会を設けてくださった関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

す。今回の受賞は、神経科精神科の坂本先生の暖かいご指導と、同研究室メンバーのおかげで成し遂げることができました。改めて、心からお礼申し上げます。

発表内容は「新型コロナウイルス禍による生活リズムの変化が5歳児の睡眠に与える影響」です。睡眠は子供の発達、行動、情緒にとって極めて重要な要素です。新型コロナウイルス禍

の影響により、リモートのワークやマスク生活、行事・イベントの中止など新しい生活スタイルが広く受け入れられています。これらの生活リズムの変化が子供の睡眠習慣にどのような影響を与え、その変化が彼らの行動や感情にどのような影響を及ぼしているかを検証しました。青森県弘前市の五歳児を対象とした検証結果によれば、新型コロナウイルス禍による生活リズムの変化は、五歳児の睡眠時間にほとんど影響を与えなかった。さらに、新型コロナウイルス禍中にもかかわらず、幼児の行動や情緒はより安定しているとい

研究室研修優秀発表賞を受賞

医学科四年 畠山紗希

この度は研究室研修優秀発表賞をいただき、誠にありがとうございます。脳神経生理学講座の上野先生、下山先生、古川先生には手厚いご指導をいただき心からお礼申し上げます。私は元々法学部出身で弘前大学に学士編入したということもあり、今まで実験に携わる機会が皆無に近かったのですが、今回の研究室研修では基礎研究について大変多くのことを学ばせていただきました。

用して物理的に膜タンパク質を分離できた瞬間は、非常に感動しました。ピペットマンの操作をまともにできない状態から開始しましたが、先生方に手厚くご指導いただき、最終的にはTCCの発現量の変化を無事捉えることができました。

また、実験のみならず発表や論文の書き方についても多くを学びました。自分

の研究結果を限られた時間内に正確に、かつわかりやすく伝えるために何度も発表の仕方を変えて工夫しました。研究室研修では、科学の分野において使用する英語の表現のみならず、わかりやすい言葉・図を用いた説明の仕方についてご指導いただきました。今後でも学中可能な限り、自分の携わった研究に取り組んでいきたいと思っています。

最後に、改めてまして研究室でお世話になった先生方、そして同じ研究室に配属された仲間の学生に深く感謝を申し上げます。

開催報告

第30回アレルギー週間市民公開講座
「アレルギーとの上手な付き合い方」

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座
教授 松原 篤

により家族との時間が増加したことで、幼児にとってより安定した環境が築かれていたのかもしれない。

研究室研修において、何度度も有意差のある検証結果が得られなかったため、非常に焦る時期がありました。その際、坂本先生はご多忙にも関わらず、研修ツールの使い方から検証データの読み方まで、丁寧にご指導くださりました。

神経精神医学講座・神経科、精神科の皆様のおかげで、非常に充実した研修時間を過ごすことができました。

この場を借りて、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



制御している」という仮説のもと、14-3-3 α の遺伝子をノックダウンし、膜上にあるGABA_A受容体の発現量を調べた。14-3-3というタンパク質のファミリーはとりわけ脳での発現量が多く、結合タンパク質が何百種類も存在するとされています。14-3-3 α と特定の結合タンパク質を選択的に制御することができれば、新たな治療薬の発見につながるのではないかと考えられます。

研究室研修を通して、自分が想像していた以上に、基礎研究というものには緻密な作業を必要とし、トライアル・アンド・エラーの上で成り立っているのだと気づきました。免疫染色したスライドガラスにピントが合い発光の様子が見えた瞬間や、磁気ビーズなどを利

令和六年二月二十三日の十四時から二時間に渡って、中三弘前店八階スペースアストロにて「アレルギーとの上手な付き合い方」と題した市民公開講座が、約四十名の市民の方を迎えて開催されました。二月十七日から二十三日は、IGE抗体を発見した石坂先生ご夫妻の功績を讃えるために日本アレルギー協会によりアレルギー週間として制定されており、毎年この時期に全国各地で講演会や医療相談が開催されます。弘前大学医学部附属病院は青森県アレルギー拠点病院に指定されており、本



(次ページへ続く)

(前ページより)

咽喉科頭頸部外科の松原がご挨拶ならびにアレルギー週間の意義について簡単に話した後に、眼科の工藤孝志先生と小児科の津川浩二先生の司会により講演会が開催されました。最初の講演1として、耳鼻咽喉科頭頸部外科の高畑淳子先生から「二〇二四年の青森県スギ花粉飛散予測」についてお話がありました。青森県では戦後に植林されたスギが生育して大量の花を飛散させる状態になっており、特に今年の青森県内のスギ花粉飛散は例年よりも多いことが予測されるとの事でした。講演2は、臨床検査医学講座の糸賀正道先生から「あなた(喘息)といきる・あなた(喘息)と共に生きていく」のタイトルでお話いただきました。糸賀先生はミュージシャンでもあり、歌手の故テレサ・テンさんの曲名を講演のタイトルに借りて、ユーモアを交えながら喘息の病態や治療についてわかり易く講演いただきました。講演3は、皮膚科学講座の新教授である赤坂英二郎先生の「アトピー性皮膚炎ってどんな病気？」最新の治療を中心に「のタイトルでお話いただきました。アトピー性皮膚炎の治療は、これまではステロイド外用薬が主体でしたが、近年の生物学的製剤の発達により大きく治療内容が変わってきました。アトピー性皮膚炎に関連する種々のサイトカインを抑制する抗体製剤(注射薬)や、免疫細胞のサイトカイン産生に関わる酵素(JAK)の阻害薬(経口・外用)など、新しい治療をご紹介いただき、本当に時代が変

BMRC 第二回 学術セミナーの開催について

バイオメディカルリサーチセンター
センター長 伊東 健

バイオメディカルリサーチセンター(BMRC)は二〇二四年一月一日に未病医学・脳科学を中心とした医学分野の学術研究、中でも未病医学研究の活性化を第一の目的として発足しました。その記念すべき第一回学術セミナーが健康未来イノベーション研究機構との共催にて二〇二四年三月十九日(火)に健康未来イノベーションセンター一階セミナー室において開催されました。講師の先生は筑波大学国際統合睡眠医学研究機構(WPI-IIS)の朴寅成先生と徳山薫平先生で、それぞれ「オレキシン受容体拮抗薬の投与が睡眠時エネルギー代謝に及ぼす影響」と「睡眠時エネルギー代謝の柔軟性」というタイトルでご講演いただきました。睡眠、食事、運動が健康増進に及ぼす効果の研究は重要で、中でも睡眠が認知症を始めとした疾患に与える影響については近年特に注目が集まっているところです。WPI-IISの丹羽康わつてきたことを実感した講演でした。

講演終了後のQ and Aコーナーでは、悩んでいること困ったことなど多くの質問に対して講師の先生方が丁寧にお答えして、市民の方々にもご満足いただいた有意義な時間となりました。関係各位に御礼を申し上げて開催報告といたします。

第37回日本糖尿病・肥満動物学会 年次学術集会を開催して

分子病態病理学講座
教授 水上 浩 哉

ことが期待されます。ところで今回お話をされた二人の先生はいずれの先生もヒューマンカロリーメータを駆使して睡眠の研究をされています。カロリーメータの利点は時間分解能が高く長時間の酸素消費量測定ができることがメリットです。覚醒時には分からなかった変化が見えてくる可能性もあります。徳山先生のお話では睡眠時には呼吸商が低下するのですがその低下が加齢にもなっていることがわかり、それが生活習慣病の予兆になるのではないかとのお話もありました。弘前大学COINEX研究拠点ではヒューマンカロリーメータの導入も現在検討しているところとあります。

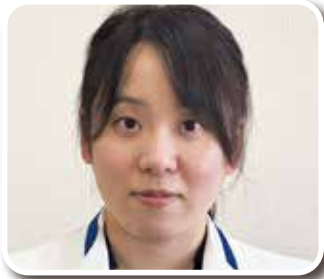
二〇二四年三月十五日、十六日に第三十七回日本糖尿病・肥満動物学会年次学術集会を弘前大学創立50周年記念会館で開催させていただきました。ご報告させていただきます。日本糖尿病学会・肥満動物学会は糖尿病学会の分科会で、糖尿病、肥満の動物実験に特化した基礎色強い学会です。青森開催は二〇〇三年に前任の八木橋操六先生が八戸で開催して以来、約二十年ぶり、また四年ぶりの対面かつ地方開催となりました。初日の特別講演では北海道大学の伊庭靖弘先生に最新の化石研究についてお話をいただきました。糖尿病も動物も肥満も関係ないご講演

演でしたが、そのシステムの構築法など圧倒された一時間でした。座長を務めていただいた虎の門病院の門脇孝先生には、その後本学医学部で特別講演を行っていただきました。また、会長企画では、学生セッションにおいて会場の先生方に審査員となっていたいただき、三名の学生優秀発表賞の受賞者を選考することができました。その後、四年ぶり各賞の授賞式、懇親会をアートホテル弘前で開催し、百名以上の先生方に懇親会にご参加いただきました。余興の弘前大学の津軽三味線サークルによる演奏などがありました。地酒とシードルの飲み比べが最も好評だったようです。会員同士で活発な情報交換ができ、やはり学会には懇親会が必要と強く思った次第です。二日目は「合併症克服に向けた各合併症研究の最新線」と題したシンポジウムを開催し、各分野の先生方に貴重な講演をいただきました。特別講演2では東北大学の片桐秀樹先生にご講演をいただきました。片桐先生には臓器連関による血糖コントロールについてこれまでの成果のみならず、研究の進め方に関してもお話いただきました。若い研究者に対してのみならず、指導者の先生方にも多くの示唆が得られたのではないのでしょうか。プレナリーレクチャーでは八木橋操六名誉教授に弘前でつく

第6回 若手研究者紹介動画

医学研究科では、各講座で研究されている40歳未満の若手研究者に、現在取り組んでいる研究内容や、研究を志したこれまでの経験を自ら紹介いただくことで、他の若手研究者や学部学生の研究に対する意欲を養うことに加え、紹介した若手研究者自身のモチベーションを向上させることを目的として、「研究者紹介動画」を作成・公開する取り組みを始めました。

第6回目は神経精神医学講座の照井 藍(てるい あい)先生。『5歳ASD児の睡眠の問題とメラトニンの関係』をご紹介します。



助手 照井 藍
(神経精神医学講座)

医学研究科ホームページで
公開中！

紹介動画はこちら ↓



平成十九年の国連総会で、毎年四月二日を「自閉症啓発デー」とすることが決議されました。毎年四月二日(四月八日)を発達障害啓発週間とし、世界各国で自閉スペクトラム症をはじめとする発達障害の啓発のためのシンポジウムやランドマークのブルーライトアップなどが行われています。当講座では、平成二十五年から弘前市および弘前市教育委員会のご後援のもと、弘前自閉症児者親の会と合同で特別講演会やシンポジウムなどを開催しています。コロナ禍ではオンラインで特別講演会を開催していましたが、今年の四月二日は弘前大学医学部コミュニケーションセンターで対面で特別講演会を開催し、当事者の方や保護者の方、支援者の方など沢山のの方に、お集まり頂きました。一般社団法人Focus on代表理事

第12回世界自閉症啓発デー 特別講演会in弘前

神経精神医学講座 教授 中村 和彦

／立命館大学 産業社会学部の森本陽加里さんをお招きし「発達障害当事者の世界とそれを覗くアプリの開発」という演題でご講演頂きました。森本さんは、通常学級に在籍しながら発達障害と診断され、二度の不登校を経験されました。そのご経験から、発達障害児にとって学校をより選択しやすい学びの場にしたと考えられ、学校内で発達障害児一人一人に合った支援を実現するアプリ「Focus on」を考案し、第七回高校生ビジネスプラングランプリで審査員特別賞を受賞されました。現在は一般社団法人Focus on代表理事としてプロデュースや企画を担当され、全国各地でご講演もされています。今回の特別講演会では、幼少期から今日まで感じてきた苦悩や、これまでお母様や学校の先

(次ページへ続く)



(前ページより)

生から受けた支援の中で有効だった支援などをご紹介頂きました。当事者かつ支援者という、森本さんだからこそできる唯一無二のご講演で、特に保護者の方からは「子どもたちがどのように感じているか言葉にして聞かせてもらえてよかった」「ぜひ森本さんのお母様のお話も聞いてみたい」など多くの感想を頂きました。また、弘前市に後援して頂き、四月二日没から弘前城天守閣のブルーライ



学生だより

一年間を振り返って

一年間を振り返って

医学科三年 相場 奏

心から信頼し尊敬する同志と切磋琢磨し、豊かな経験を積んだこの一年は、「充実」の一言で収まらないほど印象深い年となりました。医学の核とも言える解剖学を幕開けにスタートした二年次では、数多くの基礎系科目を履修しました。医学は幾多もの分野に細分化されているものの、つまるところヒトという一つの生き物を学ぶ学問です。そういった俯瞰した視点をもつと、分断されている様々な科目を複合的に捉えることができます、単なる試験対策に帰着せずより深い学びに進めていく中で、今まで

一年間を振り返って

医学科三年 花 島 陽 向

「基礎医学には興味がない。早く臨床の勉強をしたい。」——一年前の自分はそう思っていた。しかし、振り返ってみるとその考え方は間違っていたと言わざるをえない。医師は、様々な疾患、すなわち、構造や機能の「異常」と向き合う職業である。そのうえで「正常」を知ることは不可欠だ。ゆえに、解剖学や生理学を通して人体の正常構造や機能を学んだ経験は、病態の理解において大いに役立つだろう。膨大な学習内容に圧倒されることもあつ

出会いが、自分を内面から磨いてくれました。この一年は、やりたいことを全部やっても余裕が残っていた一年次とは違って変わり、限られた時間を自分でどう使うかということとを常に意識させられました。取捨選択が難しく今まで通りすべてをやるうとして空回りしてしまったり、「やりたいこと」がいつの間にか「やらなければなら

「やりたくないこと」になっていた。悩んだ時期もありました。しかし振り返ってみれば、たくさんさんの失敗経験と、目の前のことにがむしゃらに食らいついた日々が、今の自分を形成する大きな財産となっていました。これからも、日々新たな

たが、複数の知識を統合し、体系的に考える力を習得することができたと思自負している。一方、「試験に受かること」だけを目的に勉強していた事実は否めな

関連病院勤務報告

地域の病院で研修して

麻酔科 医員 市川 詩 乃

弘前大学医学部附属病院麻酔科、市川詩乃と申します。平成三十一年に弘前大学を卒業し、医師六年目となります。弘前生まれ、弘前高校出身、青森市市民病院で初期研修を修了し麻酔科へと入局、その後は大学病院へ勤務いたしました。青森市市民病院での初期研修は仲間や指導医、スタッフの皆さんに恵まれとても充実したものとなり、特に麻酔科の先生方には診療科を決定する上で多くのことを学ばせていただきました。ご覧の通り、ほとんどもを青森県どころか弘前市で過ごしております。これまで狭い生活範囲に疑問を抱いてこな

地域の病院で研修して

放射線診断科 医員 梅 村 芳 史

二〇二四年四月時点で放射線診断科専攻医三年目となりました。専攻医として二年経過しましたが、まだまだ未熟な部分は多く日々経験と研鑽を積み毎日です。半年ほど地域関連病院である八戸市立市民病院で勤務する機会をいただきました。こちらで研修し経験したことをこの場をお借りしてご報告させていただきます。

専攻医二年目は八戸で始まりました。職場では毎朝大学病院を中心に遠隔の施設と共にリモートで朝カンファレンスを行っており、これに参加しながら業務を

の手術室も湿度温度管理のためかとても寒かったです。寒さへの耐性に自負のある私でも上着をはおり、患者の保温装置に思わず近づいてしまうほどの寒さでしたので青森の手術室にホッとしましたこともいい思い出です。一度県外へ出てみると、多くの人に支えられていること、思いのほか自分に地元愛があったのだと気が付いた機会となりました。色々な地域病院での勤務経験が少なく、私が進路選択に助言できることは多くありませんが青森県には確立された研修システムがあり、臨床研究教育と希望すれば満遍なく携われることが利点だと思います。麻酔科は多岐にわたる科と連携しますので、どこかで一緒に働く機会を楽しみにしております。また、麻酔科に少しでも魅力を感じてくださった方はぜひ話しかけてください。

は大学病院より診断専門医の人数が少なく、一日に撮影された画像をすべて期限内に読影するのは困難であり、緊急性の高いものから優先しています。それでも期限内に読影するのが困難な場合は、依頼された主治医へ口頭で画像所見を伝えたり、大学病院から派遣される応援医師に来ていただいたり、遠隔読影サービスを利用するなどをして画像診断に追われる毎日です。われわれ専攻医は自分なりに画像を検討し読影したあと、上級医にチェックしてもらい必要があります。なぜなら自ら読影するためには診断専門医の資格が必須であり、資格を取得するまでは日々上級医と症例について検討する必要があります。八戸市市民病院では画像診断のスペシャリストとして松倉理佳子先生が在籍しており、お忙しい中でも毎日熱心に指導していただきました。僅かな添削で済むものや、全くの見間違いなレポートで全文やり直しなど様々なチェックを受けました。しかし、一つ一つ丁寧に解説していただき、足りない知識を指摘していただいた際は参考文献も提供していただきました。忙しい中でも熱い指導をしていただきましたとても感謝しています。

留学だより

台湾研修記

救急災害・総合診療医学講座

助教 長谷川 聖子

二〇二四年二月十七日から二十二日まで、台湾の「林口長庚紀念醫院」の外傷センターに研修に行かせて頂きました。この病院は医師数千七百六十九人、医療従事者数六千七百十人という大規模な施設で、台北駅と台湾桃園国際空港の間に位置しています。研修では、外傷センターと脳神経外科のICUを中心に見学してきました。

日本での経験と比較して有益な情報交換ができました。最終日には中毒についての専門講義も受け、医療事情の違いを超えた新たな知見を得ることができました。総じて、この研修は日常の診療に直接関連しない部分もありましたが、異なる医療環境での取り組みを学び、新しい視点を得ることができた有意義な経験となりました。

若手教員・医師だより

循環器腎臓内科学講座

助教 加藤

朋

外傷センターでは、日本と比較しても異なる点が多く見られました。台湾では多くの人が原付バイクを使用しているため、外傷患者が多いことが印象的でした。この病院の外傷センターには平均して一日に七十人の患者が訪れ、センター内で急性期外傷のほぼ全てを診療できる体制が整っていました。また、ICUでは患者二人に対して看護師一人が配置されており、緊急開胸開腹手術なども迅速に行える設備がありました。脳神経外科のICUでは、多

循環器腎臓内科学講座の加藤朋と申します。弘前大学卒業後、二年間の初期研修で循環器領域に魅せられ循環器内科の世界に飛び込んでから早十年となりました。この度本誌への寄稿の機会をいただきましたので、学生や研修医の皆さんにも少しでも循環器に興味を持っていただければと思います。



学生時代にはそれほど循環器に興味を持っていませんでした。初期研修時の手技の楽しさと指導医の先生方の急変時対応のかっこよさに惹かれ、入局を決めました。当時は忙しいというイメージからQOLは大丈夫なのかという考えも頭をよぎりましたが、結局どこへ行っても忙しいのであれば一番楽しかった科をという考えに至りました。大学院卒業後は青森県立中央病院、むつ総合病院、つがる総合病院を経て、昨年度より大学へ戻りました。外病院では循環器診療全般を担う「総合循環器内科」のような

感じでしたが、大学に戻ってからは虚血グループの一員として日々診療を行っていています。しかしながらグループが虚血と不整脈の二つしかない弘前大学では、虚血性心疾患のほかにも心筋症や心筋炎、構造的な疾患（SHD）といった様々な分野の診療を行っており、カテゴリーばかりを行って

若手教員・医師だより

病理生命科学講座

助手 小笠原 健太

私は、弘前大学消化器外科専攻医七年目の小笠原健太です。大学院研究のために、大学院医学研究科病理生命科学講座でお世話になっていています。東京都大田区出身で、高校入学時に秋田に引っ越し、秋田県立秋田高等学校を卒業しました。小・中学校では野球、高校では囲碁、大学では硬式テニスをしていました。趣味はドライブと旅行です。妻の影響で全国のスターバックスを巡り、今でも毎朝コーヒを飲むのが日課です。秋田高校卒業後は弘前大学に入学し、大館市立総合病院で初期研修を行った後、市立函館病院での専攻医研修を経て、弘前大学消化器外科に戻ってきました。途中、沖縄県立八重山病院で一般外科の経験も積

ました。二〇二一年十月より大学院に進学し、病理生命科学講座に所属しながら研究と外来診療に従事しています。今回は医学部ウォーカーへの寄稿にあたり、消化器外科に入局した経緯と現状についてお話しします。

入局の経緯ですが、私は大学四年生のときに小児医療に興味を持ち、五年生の臨床実習を経て小児外科を志望しました。入局を決めたのは初期研修のときで、急性虫垂炎症例を初診から入院まで指導医と一緒に診て、痛みを抱えていた患者さんが笑顔で「ありがとう」と退院されたのを見て、自分はこの仕事をしたと確信しました。弘前大学は消化器外科、乳癌外科、甲状腺外科、小児外科と多くのサブスペシャリティを持ち、とても魅力的です。一方で医局員みんなが各領域に精通し、中核病院では手術をみんなで分担しています。これは青森県地域密着型を実現した医局の方針であり、弘前大学消化器外科の魅力のひとつだと思います。医局では常に笑顔が絶えず、入局してよかったと今でも思っています。

現在は研究のため病理生命科学講座に所属し、消化器外科の外来診療に加えて、毎日顕微鏡と向き合っています。ベッドサイドと手術室の往復に追われる日々から、一度立ち止まって基礎研究を中心に生活することで、多角的な視点を得るきっかけが生まれました。

胸部心臓血管外科学講座

胸部心臓血管外科学講座

教授 皆川 正仁

胸部心臓血管外科学講座では、大動脈弁石灰化の機序に関する研究、血管内の流体解析に関する研究、人工胸膜に関する研究、肺癌術後の脳塞栓症の機序の解明などの研究を並行して行っています。

制御できるのかを真の問として二〇〇七年より研究を開始しました。まず、石灰化大動脈弁より弁間質細胞を単離培養しました。これらの細胞は炎症性サイトカインTNFαと高リン酸に

対して感受性が高く、骨形成因子（BMP2）―アルカリホスファターゼ（ALP）を介して石灰化が亢進することを明らかにしました。さらに、弁間質細胞は細胞表面マーカーCD34が陰性化すると、易石灰化性が増します。また、多くの弁間質細胞は上皮細胞増殖因子受容体（VEGFR2）が陽性を示しているため、大動脈弁石灰化には内皮間葉移行が重要と考えられました。現在、この内皮間葉移行を有効に制御できる薬物のスクリーニングを行っています。黄連解毒湯を含む数種類の漢方薬がTNFα誘発性大動脈弁石灰化を有意に抑制することを明らかにしました。さらに、高血圧自然発症ラットを用いて

【大動脈弁石灰化の機序に関する研究】心臓弁膜症の一つ大動脈弁狭窄症は重症化した場合、大動脈弁置換術や経カテーテル大動脈弁留置術の適応となります。しかし、弁石灰化の進行を抑制する有効な薬物は未だに開発されていません。我々は、なぜ弁に石灰化が起こるのか、石灰化を

自然発症の大動脈弁狭窄症および弁石灰化モデルを作成し、黄連解毒湯の経口投与が弁石灰化の進行を抑えることをE vivoで証明しました。今後は、BMP2産生を抑える薬物の開発も行っていきたいと考えています。一方、大動脈弁石灰化の進行を有効に抑えるためには、弁石灰化の早期発見が大切であると考え、岩木いきいき健診で心音図の解析を試みました。今後、弁石灰化に関わる内皮間葉移行のメカニズムの解明及び制御を明らかにし、弁石灰化のさらなる進行を抑える薬物治療を確立し、最終目標として、大動脈弁狭窄症の罹患率を低下させ、弁石灰化のない健康社会の確立を目指していきます。

【呼吸器外科における研究】呼吸器グループでは、年間約百六十件の呼吸器外科手術、約百件の肺癌手術をおこなっています。二〇二二年一月からは呼吸器外科ロボット手術（da Vinci）（次ページへ続く）

研究室紹介



研究室紹介



消化器外科学講座

消化器外科学講座 准教授 石戸圭之輔

（前ページより）を開始し、現在、総計百件まで実績が増えています。また、青森県内では漏斗胸に対するZ-plasty手術を行う数少ない施設の一つとして、診療および手術をおこなっています。研究面では人工胸膜作成に関する研究を神経解剖・細胞組織学講座と共同研究をおこない、再生医療として臨床への応用を

消化器外科学講座は、昭和二十四年に横哲夫教授により弘前大学医学部外科学第二講座が開講されてから、七十五周年にわたり青森県の消化器外科診療を担ってまいりました。胃癌や食道癌に代表される上部消化管疾患、大腸癌に代表される下部消化管疾患、膵臓癌や肝臓癌に代表される肝胆膵疾患、および乳癌や甲状腺癌に代表される乳癌や甲状腺疾患に苦しむ患者さんの支えとなるべく、日夜を問わず診療および研究を行ってきた歴史のある講座です。我々はこの大きな歴史を屋台骨としながら、診療、研究、および教育を三本の柱として活動しています。この三本の柱に沿って当講座をご紹介したいと思います。

消化器外科学講座では臓器別に、上部消化管グループ、下部消化管グループ、肝胆膵グループ、および乳癌甲状腺外科グループの四つのグループ編成で診療しております。しかし、多発外傷や多臓器にわたる疾患など全身治療を要する際に

目指しています。臨床面の研究では、肺癌領域では術後塞栓症（脳梗塞、腎梗塞など）が問題となりますが、昨年NCDデータ（日本の外科データベース）七万七千例余を解析し論文発表しました（Surgery Today誌）。呼吸器外科医としての教室員も増えてきましたので、今後は臨床のみならず研究面での充実を図って参ります。

は、診療グループの垣根を超え一つのチームとして診療にあたっております。年間八百件を超える多くの手術を担当しておりますので、講座内で協力しながら患者さんに安全な手術を提供することを心がけております。最近では、低侵襲手術の進化が著しく、従来の開腹手術から腹腔鏡手術そしてロボット手術へと、目まぐるしいスピードで手術方法が変化しております。我々はこの低侵襲手術の波にもしっかりと乗り、胃癌、大腸癌および膵臓癌に対するロボット手術も多く行っております。患者さんに対して安全かつ低侵襲である、より質の高い手術を求めて診療を行っております。

正しい診療にはしっかりとした研究がベールにあるべきと考えており、研究も積極的に行っております。癌診療における講座独自の臨床試験を組み、生存率向上をめざした新たな治療法の開発も試みております。直腸癌に対する化学放射線療法を組み入れた新たな治療法の開発や、癌に対する新しい術前化学療法に関する研究を進めております。全国共同臨床研究などにも参加し、患者さんの光となる治療法を探索することを心がけております。また臨床研究だけではなく、基礎研究を本学の基礎医学講座と連携しながら進めております。ゲノム生化学講座との共同研究テーマである「リキッドバイオプシーに向けた膵癌KRAS遺伝子の新たな検出方法の開発」、分子病態病理学講座とともに行っております。「糖尿病が及ぼす膵癌悪性化メカニズムに関するプロテオーム解析」、病理生命科学講座と連携した「胆管癌神経浸潤における新たな機序の解明」、および生体構造医科学講座のご



部活動紹介

ラグビー部

医学科四年 志田一真



弘前大学医学部ラグビー部第五十八代主将の志田一真です。

弘前大学医学部ラグビー部は創部一九六六年、東医体八連覇や三連覇、準優勝、東北リーグ1部所属歴ありなど歴史と実績のある部活動です。我々

ラグビー部は週三回（水、金、土）の練習を主に文京グラウンドで行っています。短い練習を濃く行うことで他の部活よりも練習日数は少ないですが常に強豪校として東医体で闘っています。

ラグビー部にはイベントも盛りだくさんで、四月に花見、五月に新歓BBQ、六月に医進戦、七月に海BBQ、東医体優勝祈願神社参り、八月に東医体、九月に十月に秋リーグ、一月にスキー合宿があります。オフもきっちりあり、東医体後や、二、三月がオフで、十一月十二月は練習量が減る期間があります。オフの間にやりたいこともしっかりとできるためプライベートも充実しています。先輩後輩の仲もととてもよく、厳しい上下関係はありません。

現在部員はプレイヤー二十六人、マネージャー九人の計三十五人で、医学科はもちろん保健学科の部員も多数います。

ラグビー部の最大の特徴は初心者が七〜八割ほどいることです。つまりラグビーは大学から始めることができます、かつ東医体優勝できる部活なのです。

最後にラグビーの魅力をご紹介します。ラグビーは色々な特徴を持った人が一度に多く出場できます。足の速い人、体の大きい人、キックが上手い人様々な人

自転車競技部

医学科四年 佐々木清順



医学部自転車競技部は、二〇一四年四月に設立された比較的新しい部活で、今年度で設立十一年目となりました。自転車「競技」部と聞くと、激しいトレーニングを重ねてレースで上位を目指すようなイメージを持たれる方が多いかと思いますが、私自身、入学して入る部活を悩んでいたときにはそのような印象を持っていました。しかし実際には、私含め部員のほとんどが大学に入学するまでロードバイクに乗った経験がなく、初心者からのスタートです。そのため、部内はとてほろほろ温かい雰囲気、初心者でも気軽に活動に参加することができると思っています。

活動は毎週土曜日で、鶴の舞橋（鶴田町）や道の駅ビーチにしまや（西目屋村）などを目的地として、景色や食べ物を楽しんでいます。市街地から十km足らずで豊かな自然を感じることもできるといって弘前市の魅力を自転車競技部では十分に堪能することができるといって、青森県の自然を感じたいと考えている方には

昨年度の東医体は残念ながら準優勝という結果に終わってしまいました。今年はしっかりと練習を積み、周りの大学を圧倒して必ず優勝します！

ラグビー部はいつでも新入生を待っています！ラグビー入らないと厳しいって！危機感持った方がいいって！

弘前大学で一番強い部活でお待ちしております。

もってこいの部活です。また、活動が週に一回であるため他の部活との両立がしやすい、現在も半分以上の部員が兼部しています。

普段の活動の他に、六月に北海道ニセコ町で行われるニセコクラシックや、十一月頃に沖縄県で行われるツール・ド・おきなわなどの大会に出場する部員もあり、特にニセコクラシックは選手やマネージャーとして多くの部員が参加する一大イベントです。これら大会で良い記録を残すため、毎週の活動の他に自主的にトレーニングに励んで高みを目指す部員もいます。

また、毎年七月末には顧問の漆館聡志教授や監督の黒瀬顕教授をお誘いして、（次ページへ続く）



白岩森林公園（平川市）を目的地にライドを行いいます。弘前大学には、漆館教授や黒瀬教授の他にもロードバイクを趣味にされている先生方がいらっしゃるのので応援のほどよろしくお願いたします。

人事異動 (R6.3.1 ~ R6.5.31)

●医学研究科所属

【定年退職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R6.3.31	附属地域基盤型医療人材育成センター（医学教育学）	教授	鬼島 宏	附属地域基盤型医療人材育成センター（医学教育学） 特任教授

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R6.4.1	内分泌代謝内科科学講座	准教授	高安 忍	内分泌代謝内科科学講座 講師
R6.4.1	地域医療学講座	准教授	藤田 雄	循環器腎臓内科科学講座 講師
R6.4.1	むつ下北地域医療学講座	講師	石田 祐司	心臓病速隔管理システム開発学講座 助教

【採用】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R6.4.1	附属地域基盤型医療人材育成センター（医学教育学）	特任教授	鬼島 宏	附属地域基盤型医療人材育成センター（医学教育学） 教授
R6.4.1	放射線腫瘍学講座	講師	廣瀬 勝己	放射線治療科 医員
R6.4.1	消化器血液免疫内科学講座	助教	吉田 健太	手稲溪仁会病院消化器病センター
R6.4.1	循環器腎臓内科学講座	助教	劉馬 迪子	大館市立総合病院
R6.4.1	内分泌代謝内科学講座	助教	柳町 剛司	滋賀医科大学
R6.4.1	胸部心臓血管外科学講座	助教	渡邊 伸之助	大館市立総合病院
R6.4.1	皮膚科学講座	助教	松本 実か	皮膚科 医員
R6.4.1	放射線腫瘍学講座	助教	佐藤 まり子	放射線治療科 医員
R6.4.1	産科婦人科学講座	助教	門ノ沢 結花	弘前総合医療センター
R6.4.1	脳神経外科学講座	助教	梶 友紘	川崎市立多摩病院聖マリアンナ医科大学
R6.4.1	先進血液浄化療法学講座	助教	小玉 寛健	名古屋日赤第二病院
R6.4.1	感染症生体防御学講座	助手	渡部 菜穂子	弘前医療福祉大学
R6.4.1	泌尿器科学講座	助手	尾崎 魁	つがる総合病院
R6.4.1	形成外科学講座	助手	樋口 彩子	形成外科 医員
R6.4.1	救急災害・総合診療医学講座	助手	齋藤 くるみ	麻酔科 医員
R6.4.1	附属バイオメディカルリサーチセンター（脳神経内科学）	助手	引地 浩基	八戸市立市民病院
R6.4.1	附属バイオメディカルリサーチセンター（分子病態病理学）	助手	飯崎 正樹	弘前大学大学院医学研究科 大学院生
R6.4.1	脳卒中・血管内科学講座	助手	濱浦 爽悟	八戸市立市民病院
R6.4.1	心臓病速隔管理システム開発学講座	助手	日山 芽惟	産科婦人科 医員
R6.4.1	女性の健康推進医学講座	助手	三上 智香	産科婦人科 医員
R6.5.1	先進移植再生医学講座	特任教授	大山 力	青森県 病院事業管理者
R6.5.1	地域侵襲制御医学講座	特任教授	廣田 和美	青森県立中央病院 病院長

【配置換】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R6.4.1	教育学部（教育保健）	教授	島田 美智子	地域医療学講座 准教授
R6.4.1	泌尿器科学講座	准教授	山本 勇人	先進血液浄化療法学講座 准教授
R6.4.1	内分泌代謝内科学講座	講師	田辺 壽太郎	内分泌内科、糖尿病代謝内科 講師
R6.4.1	循環器腎臓内科学講座	助教	加藤 朋	高度救命救急センター 助教
R6.4.1	内分泌代謝内科学講座	助教	遼野井 祥	内分泌内科、糖尿病代謝内科 助教
R6.4.1	大館・北秋田地域医療推進学講座	助教	赤石 麻美	産科婦人科学講座 助教
R6.4.1	総合地域医療推進学講座	助教	濱浦 季穂	内分泌内科、糖尿病代謝内科 助教

【任期滿了退職】

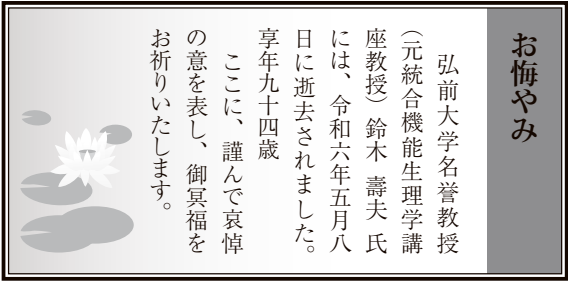
発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R6.3.31	先進移植再生医学講座	特任教授	大山 力	青森県 病院事業管理者
R6.3.31	QOL推進医学講座	助教	樋口 望	八戸工業高等専門学校
R6.3.31	附属バイオメディカルリサーチセンター（脳神経内科学）	助手	渋谷 絵里	脳神経内科 病院助手

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R6.3.31	麻酔科学講座	教授	廣田 和美	青森県立中央病院 病院長
R6.3.31	内分泌代謝内科学講座	准教授	薩山 和則	東北医科薬科大学
R6.3.31	泌尿器科学講座	准教授	橋本 安弘	三沢市立三沢病院
R6.3.31	胸部心臓血管外科学講座	講師	近藤 慎浩	青森市民病院
R6.3.31	むつ下北地域医療学講座	講師	西崎 史恵	医療法人深仁会手稲溪仁会病院
R6.3.31	消化器血液免疫内科学講座	助教	五十嵐 剛	国立がんセンター東病院
R6.3.31	消化器科学講座	助教	鎌谷 卓司	つがる総合病院
R6.3.31	循環器腎臓内科学講座	助教	金城 貴彦	東京女子医科大学
R6.3.31	循環器腎臓内科学講座	助教	金城 育代	明正会錦糸町クリニック
R6.3.31	放射線腫瘍学講座	助教	川口 英夫	青森県立中央病院
R6.3.31	附属バイオメディカルリサーチセンター（脳神経内科学）	助教	今 智矢	八戸市立市民病院
R6.3.31	附属バイオメディカルリサーチセンター（分子病態病理学）	助教	竹内 祐貴	八戸市立市民病院
R6.3.31	総合地域医療推進学講座	助教	佐藤 江里	健生病院
R6.3.31	脳神経外科学講座	助手	柳谷 啓太	十和田市立中央病院
R6.3.31	形成外科学講座	助手	福岡 学	函館五稜郭病院
R6.3.31	救急災害・総合診療医学講座	助手	平井 直樹	むつ総合病院

診療教授等新規称号付与者 (R6.3~R6.5)

姓 名	氏 名	所 属	期 間
診療教授	珍田 大輔	光学医療診療部	令和6年4月1日～令和9年3月31日
診療准教授	齊藤 良明	心臓血管外科	令和6年4月1日～令和9年3月31日
診療教授	村上 千恵子	脳神経内科	令和6年5月1日～令和9年4月30日



お悔やみ

弘前大学名誉教授（元統合機能生理学講座教授）鈴木 壽夫氏には、令和六年五月八日に逝去されました。享年九十四歳。ここに、謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈りいたします。

編集後記

温暖化の影響で、今年の弘前城の桜の開花は例年よりも一週間ほど早まったようですが、来場者数は昨年よりも多く、約二百五十万人だったとのこと。海外からの旅行客がコロナ禍前に比べて三割ほど増えたとのことですので、新型コロナウイルス感染症への対応が緩和されたことに加え、昨今の円安も大きく影響したものと思われまふ。温暖化といえは、日本では春と秋の期間が短くなり、四季が二季になってしまふのではないかとというような話もあるそうです。新型コロナウイルス感染症の流行の影響もあるのだとは思いますが、インフルエンザの流行の季節性が以前ほど感じられなくなったり、夏に流行するはずの咽頭結膜熱（プール熱）が秋から冬にかけて流行したりするなど、感染症の流行にも季節性がなくなってきたように思います。

さて、本号は新医学研究科長、前医学研究科長、附属病院長からのご挨拶に始まり、最終講義、前立腺がんの新規診断法の実用化、DMAT活動の報告など、大変充実した内容となっています。若手教員や学生の皆さんからもたくさん寄稿していただき、多くの皆さんに楽しんでいただける内容になったのではないかと思います。ご寄稿いただいた皆様に感謝いたしますとともに、これからも医学部ウォーカーへのご支援をどうぞよろしくお願い致します。

バドミントンサークル ラブオール

医学科四年 岩 松 英 賢

バドミントンサークルラブオールは二〇二三年十一月に新設したサークルで現在八十八名（二〇二四年五月七日現在）が在籍しています。顧問は消化器外科学講座の三浦卓也先生です。医学、看護、放射線、検査、理学、作業の幅広い学科のメンバーが参加し、活動は毎週土曜日の十九二十一時に弘前市立松原小学校の体育館をお借りして行っています。当サークルの活動は弘前市が行っている学校開放事業を活用し、児童生徒が帰宅した放課後に体育館を利用して頂いており、弘前市の協力の下で成り立っています。

私自身幼少期に中国に住んでいたこともあり、卓球に次ぐ国民的スポーツとして近所の公園でも自宅マンションでも至る所で盛んに行われていたため、小さい頃からバドミントンの馴染みは深い。あるスポーツで入学した。大学からでも入学し

●附属病院所属

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R6.4.1	内分泌内科、糖尿病代謝内科	講師	松木 恒太	内分泌内科、糖尿病代謝内科 助教
R6.4.1	泌尿器科	講師	相馬 理	泌尿器科 助教
R6.4.1	形成外科	講師	和田 尚子	形成外科 助教
R6.4.1	循環器内科、腎臓内科	助教	奈川 大輝	高度救命救急センター 助手
R6.4.1	泌尿器科	助教	濱谷 智子	泌尿器科学講座 助手
R6.4.1	麻酔科	助教	紺野 真緒	麻酔科 助手
R6.4.1	集中治療部	助教	赤石 真啓	集中治療部 助手

【採用】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R6.4.1	血液浄化療法部	准教授	今井 篤	鷹揚郷賢研究所弘前病院
R6.4.1	消化器内科、血液内科、膠原病内科	助教	浅利 享	黒石病院
R6.4.1	循環器内科、腎臓内科	助教	鹿内 駿	青森県立中央病院
R6.4.1	皮膚科	助教	相楽 千尋	皮膚科 医員
R6.4.1	放射線診断科	助教	辰屋 宗一郎	弘前総合医療センター
R6.4.1	麻酔科	助教	菅沼 拓也	むつ総合病院
R6.4.1	形成外科	助教	内田 達士	麻酔科 医員
R6.4.1	形成外科	助教	飯田 圭一郎	函館五稜郭病院
R6.4.1	小児外科	助教	齋藤 傑	国立成育医療研究センター
R6.4.1	リハビリテーション科	助教	武田 温	青森市民病院
R6.4.1	高度救命救急センター	助教	山崎 堅	青森市民病院
R6.4.1	集中治療部	助教	川口 純	つがる総合病院
R6.4.1	周産母子センター	助教	湯沢 健太郎	三沢市立三沢病院
R6.4.1	麻酔科	助手	伊藤 磨矢	麻酔科 医員

【配置換】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R6.4.1	内分泌内科、糖尿病代謝内科	助教	西谷 佑希	内分泌代謝内科科学講座 助教
R6.4.1	産科婦人科	助教	飯野 香理	大館・北秋田地域医療推進学講座 助教
R6.4.1	産科婦人科	助教	大石 舞香	女性の健康推進医学講座 助教
R6.5.1	産科婦人科	助教	追切 裕江	産科婦人科学講座 助教

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R6.3.31	周産母子センター	准教授	田中 幹二	弘前総合医療センター
R6.3.31	血液浄化療法部	准教授	米山 高弘	つがる総合病院
R6.3.31	整形外科	講師	木村 由佳	健生病院
R6.3.31	形成外科	講師	齋藤 百合子	八戸市立市民病院
R6.3.31	消化器内科、血液内科、膠原病内科	助教	速水 史郎	つがる総合病院
R6.3.31	循環器内科、腎臓内科	助教	西崎 公貴	手稲溪仁会病院
R6.3.31	呼吸器外科、心臓血管外科	助教	松尾 翼	秋田大学
R6.3.31	皮膚科	助教	福井 智久	上田皮膚科 医師
R6.3.31	眼科	助教	工藤 孝志	十和田市立中央病院
R6.3.31	放射線診断科	助教	角田 晃久	青森県立中央病院
R6.3.31	麻酔科	助教	豊岡 憲太郎	十和田市立中央病院
R6.3.31	麻酔科	助教	矢越 ちひろ	弘前総合医療センター
R6.3.31	リハビリテーション科	助教	新戸部 隼士郎	市立函館病院
R6.3.31	整形外科	助手	石橋 光	JCHO 秋田病院
R6.3.31	泌尿器科	助手	奥山 佐治	八戸平和病院
R6.3.31	泌尿器科	助手	富樫 昶	大館市立総合病院
R6.3.31	泌尿器科	助手	石井 伯昂	青森労災病院
R6.3.31	産科婦人科	助手	田口 朋子	むつ総合病院
R6.3.31	麻酔科	助手	山崎 尚真	健生病院
R6.3.31	脳神経外科	助手	渡邊 亮太	つがる総合病院
R6.3.31	脳神経外科	助手	佐々木 貴夫	聖マリアンナ医科大学
R6.3.31	小児外科	助手	鈴木 貴弘	弘前総合医療センター
R6.3.31	集中治療部	助手	加藤 広大	青森県立中央病院
R6.3.31	周産母子センター	助手	田中 龍彦	小児科 医員
R6.3.31	高度救命救急センター	助手	一山 紗彩	沖縄県立南部医療センター

臨床教授・臨床准教授新規称号付与者名簿（令和6年4月1日付）

称 号 名	氏 名	所 属	称号付与期間
臨床教授	齋藤 太郎	黒石市国民健康保険黒石病院 病院長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床教授	遠藤 哲	黒石市国民健康保険黒石病院 内科	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床教授	阿部 直樹	つがる西北五広域連合つがる総合病院 循環器・呼吸器・腎臓内科医部長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床教授	坂橋 泰人	十和田市立中央病院 整形外科 診療部長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床教授	沼沢 拓也	八戸市立市民病院 診療局次長兼第一整形外科部長 兼リハビリテーション科部長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床教授	田中 幹二	独立行政法人国立病院機構 弘前総合医療センター 産婦人科部長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床教授	大友 教曉	青森労災病院 麻酔科部長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床准教授	金澤 浩介	青森県立中央病院 消化器内科 部長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床准教授	金澤 洋	青森県立中央病院 リウマチ膠原病内科 部長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床准教授	赤木 智昭	青森県立中央病院 輸血・細胞治療部 部長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床准教授	花畑 恵洋	青森県立中央病院 消化器内科 部長、内視鏡部 部長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床准教授	岡山 恒	独立行政法人国立病院機構 弘前総合医療センター 消化器・血液内科 医長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床准教授	山田 聖典	大館市立総合病院 消化器・血液・腫瘍内科 部長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床准教授	矢越 雄太	つがる西北五広域連合つがる総合病院 消化器外科第二科長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床准教授	平賀 康晴	市立函館病院 整形外科 主任医長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床准教授	大澤 有姫	大館市立総合病院 産婦人科部長	2024年4月1日～2027年3月31日
臨床准教授	小野 朋子	弘前記念病院 麻酔科長	2024年4月1日～2027年3月31日